

## 日本海岸方面に於ける暖地要素の二三に就て

小 泉 源 一

日本海沿岸方面と之と同緯度の太平洋海岸方面との氣候を比較すると、日本海方面は餘程暖い、かつて例の天然記念物調査報告にウラジロの分布の事を書いてあるのを見たが日本海方面は山陰道あたりで止つて居た、然し實際は越後國海府ノ浦に達して居り、同じく天然記念物調査報告は羽後の男鹿半島の南海岸の椿部落を以てヤブツバキの北限地となせども實は、陸奥の國深浦地方に及んでゐる。其他一々此に述べざれど、烏海山の北麓で孟宗竹や無花果が栽培され、飛島の植物景觀は暖帶南部に見る如き林相である、有名な象潟は處處に暖地性植物を栽植してゐる等、意外の心地せらるるが實は如此き暖い地方である。ついでに是は太平洋側の事だが天然記念物調査のやうな伊勢神宮神域植物調査書には、ケイノキ (*Loropetalum chinense* Oliv.)の産する事を洩らしてあるが今年篠原、大井、三木の諸士が神路山に採集した、ケイノキは支那中南部には甚多く西はヒマラヤに及んでゐる木本で、マンサク科のもので丁度トサミヅキ屬と同一軌の分布をするものである。

## ヤクタネゴエフ と デハトネリコ

小 泉 源 一

ヤクタネゴヤウ (屋久種子五葉松) (*Pinus Amamiana* Koidz.) は屋久島、種子島のみに天生する五葉松の一種にして特産なり、近時本種を中部支那産の *Pinus Armandii* FRANCH. と同一種となす人あり、然し予が巴里博物館腊葉室に保存さるるフランセー氏の原品と比較せしに、全く別種にして殊に其葉の横断面等に於ては截然之等を別つべし。

デハトネコリ (*Fraxinus stenocarpa* Koidz.) は山形縣米澤市、林泉寺町、遠藤龜次氏宅地に現存するもの即ち本種のタイプなり、近時之を *Fraxinus Spaethiana* LINGELH. と同一種と見る人あり、之は前件よりも大なる誤にして、*Fraxinus Spaethiana* LINGELH. は一八七五年頃 HAUMIE 氏庭園に栽培しある出處不明の植物に命ぜしものなり、現今伯林ダーレム植物園にも之を栽培せり。此植物は果して日本産なるや研究の餘地あり。

## 莎草科植物雜記 (1)

大 井 次 三 郎

1) オホツルスゲー *Carex pseudo-loliacea* Fr. SCHM. は従來樺太、千島及び北海

道に産する事が知れて居た濕地生のスゲであるが昨年山形農事試験場の奥山春季氏がこれを羽前國、吾妻山で採集せられた、本州での新品に屬する。

此の植物にはオホツルスゲ、セイタカツルスゲ等の和名があるがツルスゲ即ち *Carex pseudo-curaica* Fr. SCHM. とは縁も遠く蔓も出ず外觀も違つたもので何となく面白くないのでイツボンスゲ即ち *Carex tenuiflora* Wg. に似て葉巾の廣い點からヒロハイツボンスゲと改名したい。

2) 頃日故 FAURIE 氏採集の控標本で LÉVEILLÉ 氏が *Carex cernua* BOOTT 即ちアゼナルコスゲと檢定した植物を再調査したが同氏がアゼナルコスゲと發表した標本には實に七つの異つたものがある。

1901年の Bulletin de l'Académie internationale de Géographie botanique 誌第10巻197頁に於ては (VANIOT 氏共著)、

1. アヅマナルコ (ns. 1066, 1623).
2. ヒメガウソ (n. 2746).
3. アゼナルコ (n. 4376).
4. テキリスゲ (n. 4379).

の四種を混じ、同1903年599頁では

5. テウセンカサスゲ (n. 924).
6. アゼナルコ (n. 925).

1905年の Mémoires de la Société nationale des Sciences naturelles et mathématiques de Cherbourg 誌第35巻215頁に於ては (VANIOT 氏共著)

7. テウセンカサスゲ (n. 924).
8. オタルスゲ (n. 2746).
9. ヤマテキリスゲ (n. 5162).
10. アヅマナルコ (n. 5166).
11. テキリスゲ (n. 5321).

その上此れ等の七種の内六種までは同氏が他の標本によつて新種として記載して居るものである、此れによつて見ると同氏が如何にてたらめな發表をしたか、想像がつく。

先きに中井博士が朝鮮濟州島の植物の上からも東京植物學雜誌上に同様の批評をせられたが今更乍らその亂暴さにあきれざるを得ない。

スゲをついて居る關係上私に取つても随分迷惑な話しではある。

3) クリイロスゲ— *Carex diandra* SCHRANK は本邦では北海道及び千島に産する

April, 1932.

99

スゲで本州では信濃國、飯綱ヶ原に産する、私は昭和二年に同地で採つたが吉野善介氏の標本彙にも同地産の標本があつた。又樺太にも從來未記録のものであるが菅原繁藏氏が同地の江ノ浦で採集された。

和名が見當らぬので以後上記の新名を以て呼ぶこととする。

4) アンペラの學名には *Lepironia mucronata* RICH. が一般に用ひられて居るがそれよりも古い *Restio articulatus* RETZ. を改めた *Lepironia articulata* DOMIN. が正しい。

5) クロガヤツリ—*Cyperus fuscus* LINN. は歐羅巴からヒマラヤを経て中部支那まで分布するカヤツリグサの一種であるが昨年關東州の大連、沙河口で同地の小林勝氏が採集せられた。和名が見當らぬので上記の名を與へた。

6) マスクサの學名—*Carex gibba* Wg. は THUNBERG 氏の採品によつて記載されたもので從來の學者は BOOTT 以來吾がマスクサにあてゝ居るがその原記載は次の通りである。

*C. gibba*: spiculis basi masculis inferioribus subternatis subdistantibus, squamis brevibus, capsulis sublenticularibus reticulatis convexissimo-subconvexiusculis marginibus extenuatis integris ore bidentato, bracteolis foliatis longis subangustis; culmo laxo. *C. remota* THUNBERG Flor. Jap.

少々簡單で記載だけではマスクサかそれとも眞の *C. remota* LINN. か又は *C. remota* LINN. に最も近い *C. Rochebrunni* FRANCH. et SAVAT. であるか決定出来兼ねる點があつたので瑞典 Lund の C. G. ALM 氏を煩はし同氏の厚意によつて基準標本の寫眞と果囊若干個とを貰ひ受ける事が出来た。

その結果やはり *C. gibba* Wg. はマスクサで私が一時想像した様に *Carex Rochebrunni* FR. et SAV. でもなく又 *Carex remota* LINN. でもない事が明かになつたので此所にその報道を兼ねて C. G. ALM 氏に厚く謝意を表する次第である。

7) エゾハリスゲ、エゾシロハリスゲは *Carex macilentata* FRIES (= *C. tenuiflora* var. *macilentata* O. F. LANG) であつて京都帝大の標本室には KÜNKENTHAL 氏が檢定した標本が一枚ある。厚岸(北海道)で故 U. FAURIE 氏が採集したのでその番號は 10869 である。此の標本を一見した所 *Carex tenuiflora* Wg. 即ちイツボンスゲ(シロハリスゲ)に似たもので小穂の下部のものが稍離れて居り、果囊は成熟しては居らぬが背が鋭いので稍 *C. canescens* LINN. にも似た所がある、標本が少數であるので見當が

つかず少々閉口して居た所同じく C. G. ALM 氏から歐洲の *C. macilenta* FRIES なるものはハクサンスゲ、ヒメカハズスゲとアカンスゲとの間の雜種である由御注意があり且それについての HOLMBERG 氏のレプリント及標本若干をも送つて呉れたので本邦産のものも判りかけた様な次第である。

最後の判断を下すには栽培試験か或は少くとも自生地の状態を詳細に調査せねばならぬが標本だけの上では厚岸産のものも歐洲産同様何かの雜種植物で恐らく *C. canescens* × *C. pseudo-oliacea* 又は *C. canescens* × *C. oliacea* と思はれる。

尙その外に *C. macilenta* FR. の本邦に関する報告としては FR. SCHMIDT (樺太) と宮部博士(千島)のがあるが後者は昨年北海道樺太植物誌上にてヒメカハズスゲと訂正されて居るので此の植物には関係がなく、前者も恐らく厚岸のものと同様な雜種ではあるまいかと思はれるので此れ以上の確證が上るまでは本邦のものも雜種であると考へ、純粹な植物としてのリストから除外する事とするが此の類及びアゼスゲの類はスゲ屬中でも雜種する場合が比較的多い様思はれる、此れは互ひに類似のものが多い上に殆んど全部濕地産であつて比較的一ヶ所に集る機会が多い事によるのであらう。

## 羊 齒 植 物 雜 録 1.

田 川 基 二

### 1) *Athyrium microsorum* MAKINO テバコワラビ

本種は従来、土佐國手箱山、伊豫國石槌山、瓶ヶ森、阿波國劍山等四國の高山の特産種の如く思はれてゐたが、近年丹後國青葉山(竹内敬氏)、近江國伊吹山(田代善太郎、橋本忠太郎、松山外次郎諸氏)、金鷺山(橋本忠太郎氏)、駿河國梅ヶ島村(杉本順一氏)等本州にもかなり廣い範圍に分布してゐることが知られた。FAURIE 氏はすでに1905年に信濃國乗鞍嶽に採取してゐる。No. 7234 が即ち本種である。

### 2) *Athyrium spinulosum* MILDE ミヤマイヌワラビ

樺太、朝鮮、滿洲、アムール、ウスリー、支那、ヒマラヤ等所々に分布するメシダの一種であるが、大井次三郎氏は信濃國八ヶ岳(大岩及び赤岳鑛泉)に採取された。本州では稀品である。

### 3) *Diplaziopsis javanica* C. CHR. イハヤシダ

有名な暖地性の種類で南支那、馬來、北印度、セイロン、ジャバ等に分布し、本邦では臺灣、九州には諸所に産し、伊豫の岩屋山、小田深山、大和の室生山等では以前から知られてゐたが、近年羽後國仁鮎村濁川山國有林に發見され、續て昭和五年八月、堀芳孝氏は越前國大野郡五箇村上打波に發見された。